

押し活女子の屈辱 —穴場トイレに潜む視線



隙間売ト 作

R18

推し活女子の屈辱——穴場トイレに潜む視線

隙間売ト
作

【注意事項・免責事項】

◆本作は完全なるフィクションであり、実在の人物、団体、施設、事件とは一切関係ありません。また、作中に登場する盗撮・非同意の撮影・リベンジポルノなどの違法・犯罪行為を肯定・容認・助長する意図は一切ございません。

◆本作には以下の要素が含まれます。あらかじめご了承ください。

フェチ・性癖描写・和式トイレ・放尿・無自覚・屈辱シチュエーション※排便シーンはありません。

直接的性描写・風俗店（ホテル）でのプレイ描写が含まれます。※純粋な盗撮・覗きシチュエーションのみを求めている方はご注意ください。

【第一章】遠征——最高の自分と大阪パシフィックドーム

新幹線の車窓を流れる景色が、東京から名古屋、そして京都を過ぎて大阪へと近づくにつれ、長谷川葵の胸の高鳴りは留まることを知らなかった。

「葵、京都過ぎたね。そろそろ着くよ。ねえ、メイク、崩れてない？」

隣の席でスマートフォンインカメラを鏡代わりに使っていた宮本詩織が、声をかけてくる。大学時代からの親友であり、共に『ラッキーヘブン』を追いかける最高の相棒だ。

「うん、大丈夫！ 詩織、今日のリップすごく似合ってる。大人っぽい！」

葵は膝の上に乗せたお気に入りのバッグを軽く叩いた。社会人三年目。手取りから家賃や光熱費を引けば、手元に残るお金は決して潤沢とは言えない。それでも、日々会社で上司の顔を伺い、理不尽な業務に耐えて稼いだお金の使い道は、決まっていた。アイドルグルー

プの「推し」の追っかけ。遠征。夏のボーナスの半分以上が、すべてはこの旅——ラッキー
へブンの全国ライブツアー『Lucky Days (ラッキーデイズ)』の大阪公演、大阪パシフィック
ドーム(通称・パシフィドーム)への参戦に注ぎ込まれていた。

午前十一時過ぎ、八月のムツとする熱気に包まれた新大阪駅のホームに降り立つ。
ヤバイ暑さだ。

「大阪暑すぎなんだけど」

「東京以上の暑さだね。今日何度？」

冷房の効いた新幹線を降りた途端に晒された暑さに顔をゆがめながら、詩織が答える。

「三十六度だって！ ヤバイよ」

「体温並みじゃん」

想像以上の暑さに驚きながら、二人はスーツケースを引きながらそのまま慣れた足取りで
JR線に乗り換えた。そして一駅となりの大阪駅へと移動する。駅から歩いてすぐのホテル

に寄って、大きな荷物を預けてしまうと、気持ちも軽くなった。現地に向かう前に、まずは腹ごしらえだ。

「お昼、どうする？ 何食べる？」

再び戻った、どこまでが駅なのかわからない、広大で立体的な駅の構内を歩きながら詩織が尋ねる。葵はすぐ近くのカフェを横目で見やりながら、即座に言いたいことを察した。

「大阪だし、お好み焼きとかいいんじゃない？ それに……ほら、ドリンクとかは極力控えたいし」

「あはは、そうだよね！ 理解が早くて助かる。いまラテとか大きなカップで飲んじやったら、後で絶対後悔するもんね」

「わかる！ ファミレスとか入ってさ、うっかりセットのドリンクバーとか頼んじやったら最悪だよ。元を取ろうとして清涼飲料水とかアイスコーヒー飲みまくって、本番前に絶望するパターン」

顔を見合わせてクスクスと笑い合ったが、その会話の内容は至って切実だった。

ラッキーヘブンのような、ファン層の九割以上を若い女性が占める超人気男性アイドルのドーム公演において、女の子たちの「トイレ問題」は冗談抜きで死活問題なのだ。

まず、会場である「パシフィドーム」の中にあるトイレは、災害ハザードマップで言えば完全な危険地帯だった。数万人の女性が一斉にドーム内に押し寄せるため、どこのトイレであろうと、蛇のようにとぐろを巻く絶望的な長蛇の列ができる。最後尾に並んでしまえば最後、三十分、四十分待ちは当たり前。個室に入る前に開演のベルが鳴り響き、オープニングのド派手な演出や、推しの登場シーンを見逃してしまうという、悪夢のようなリスクすら潜んでいるのだ。

かといって、「じゃあドームの最寄り駅の公衆トイレで済ませよう」という甘い考えも通用しない。改札を出る手前の階段からすでに列が伸びており、まるで亀のような歩みを強いられるのは目に見えていた。

じゃあ、ライブが終わるまでひたすら尿意を我慢するのか——それも絶対に嫌だった。せっかく何カ月も前から楽しみにしていたライブの最中、違和感と格闘しながらペンライトを振るなんて、集中できるわけがないし、無理をして膀胱炎にでもなったら折角の遠征が台無しだ。また、終わるまで我慢したとしても——終演後のドームや駅のトイレがすんなり使える保証などどこにもない。

少し待ってやっと順番が来た。混雑するお好み焼き屋のテーブル席に付き、二人でメニューをひっくり返すように丹念に検討し、結局、豚玉とイカ玉にした。

「なんで女子だけ、毎回遠征のたびにこんな苦労しなきゃいけないのよ……」

鉄板の上でジュージューと甘いソースが焦げる香ばしい匂いを嗅ぎながら、詩織が小さくため息をつく。葵もヘラで出来上がった豚玉を切り分けながら、深く同意するように頷いた。

「ほんとそれ。男の人だったらさ、男子トイレなんて並ばずに入ってサツと済ませられるじ

やん。ずるいよね」

「そう！　女子のトイレってさ、やっぱ一人ひとりの時間がかかりすぎなんだよ」

「わかる。個室の中でさ、ただ用を足すだけじゃなくて、前髪直したりメイク塗り直したり、なんなら服着替えてる子絶対いるよね。トイレの個室を更衣室かメイクルームと勘違いしてんじゃないのって思うときあるもん」

「あるある！　そういう人が入ってる個室に当たっちゃったら本当に最悪だよね。全然ドアが開かないの」

冷たいお水も口をつける程度に留め、熱々のお好み焼きをハフハフと頬張る。水分をできるだけ摂らないよう注意しながら「粉もん」で小腹を満たした二人は、店を出ると迷いのない足取りで大阪駅すぐ近くの商業ビルへと向かった。

そこは、二人が去年のツアーの大阪公演の時に見つけた「穴場のトイレ」だった。上層にオフィスがある複合ビルのため、休日はオフィス客が少なく、一般的な買い物客以

外には、観光などのメイン動線からは少し外れている。大阪は地下街が广大で、すみずみまで地下経由で行き来できるためアクセスも良好。駅にこんなに近いのに、これはまさに穴場だった。そして、混んでいることがあっても、個室の数が多く回転率が圧倒的に高いのだ。

「あそこ、たぶん混み具合ましたよね」

「うん、あそこなら回転早いからここで行っておけば安心。ドーム向かう前に行つとこ！」
地下のテナントが並ぶ奥、通路の先にあるトイレにたどり着く。予想通り、他のトイレの混雑に比べれば列は短く、数人が並んでいる程度だった。

「よし、読み通り！　ここならすぐ入れるね」

「うん、回転早いし大正解！」

数分も待たないうちに順番が巡ってきた。手前の個室が空き、詩織が「お先に！」と滑り込む。続いてその隣の個室が空き、葵も素早く中へ入った。

サツと用を足した葵は、個室を出る前にバッグからお気に入りのフェイスパウダーとリッ

プを取り出した。壁にかかった小さな鏡に顔を近づけ、前髪のハネを整え、唇にツヤを足す。パフで小鼻のテカリを丁寧に抑えていると、先に隣の個室のドアが開く音がした。

「詩織を待たせちゃう」と、急いで化粧品をバッグに押し込み、個室を出る。洗面台で手を洗っていると、隣で手を洗っていた詩織が、葵の顔を鏡越しにまじまじと見つめてきた。

「ねえ、葵」

「ん？ どうしたの？」

「あんたさっき、お好み焼き屋さんで『トイレをメイクルーム代わりに使うな』って熱弁してなかった？」

イタズラっぽく口元をほころばせる詩織に、葵は「あ……」と声を詰ませた後、照れ隠しに「いやいや」と手を振り払うフリをした。

「いいのいいの！ 後ろに誰も並んでなかったし、空いてたんだから！」

「はいはい、ダブルスタンダードねー」

「だって！ 推しに最高の自分を見てもらいたいんだもん！」

「ふふ、わかるけどさ。うん、気持ちはめっちゃわかるけどね」

お互いの顔を見合わせてクスクスと笑い合う。

洗面台の大きな鏡に映る自分たちは、完璧にメイクが整い、お気に入りの服に身を包んだ、今日一番可愛い姿だ。いや自分史上最高に可愛い姿だった。

「よしっ！ 完璧！ じゃあ、パシフィドーム行こっか！」

「うん！ 陸にアピールしまくるぞっ！」

「詩織こそ、魁くんに見てもらわなきゃ！」

陸（りく）と、魁（かい）は、ラッキーマンの中でも人気メンバーで、それぞれ二人の推しだ。

地下鉄を乗り継ぎ、ついに『パシフィドーム』の最寄り駅へとたどり着く。改札を出た瞬間から、人波と熱気が押し寄せてきた。カラフルな参戦服に身を包み、推しのうちわやバッグ、キーホルダーやぬいぐるみを持った女の子たちで駅の構内はごった返している。

ドームの敷地内に入り、入場ゲートを目指して歩いていった葵は、敷地の端にある公衆トイレの前に差し掛かった瞬間、思わず足が止まった。

「……うわ、見てあれ。凄まじいことになってる……」

葵の眩きに、詩織も視線を向けて「うそっ……」と短く悲鳴をあげた。

そこには、最後尾がどこなのかも分からないほど蛇行した、絶望的な長蛇の列ができていた。炎天下の中、日傘を差し、うちわでパタパタと胸元を仰ぎながら、仕方なく並ぶ女の子たち。見たところ列はほぼ進まず、最後尾のプラカードを持った係員が「トイレは他にもございます。分散して他のトイレもご利用ください」と声を張り上げている。

開演までまだ二時間ある。けれど、入場にもきつと時間がかかるし、広いドーム内で席も探さないといけないし、グッズだって選びたい。

「……さっき行っておいて、本当に良かったね……！」

葵が心底ホッとしたように胸を撫で下ろすと、詩織も大きく頷き、安堵の息を漏らした。「ほんとそれ！ あんなの並んでたら熱中症になっちゃうし、ぜったい間に合わないよ。こ

こでこんなじゃあ、ドームの中のトイレなんてもっとエグいよ。やっぱり穴場に行っておいて大正解だったね！」

「うん！ 結局、うちら勝ち組じゃん！」

顔を見合わせて、二人で小さくハイタッチを交わす。自分たちの作戦勝ちにすっかり気分を良くした二人は、優越感すら抱きながら、混雑する入場ゲートへとスムーズに進んでいった。

係員にQRコードと、本人確認のためのマイナンバーカードを見せ、会場入りする。

「……葵！ 今回、アリーナ！ アリーナ席だよ！ それもあんなに前の方！」

「キヤーツ！ 本当？！ やったあああ！」

通路を抜け、ドームの巨大な空間へと足を踏み入れる。天井から降り注ぐ照明と、数万人の熱気。見下ろすアリーナフロアの先には、巨大なメインステージと伸びる花道が広がっていた。

午後五時。ドームの照明が一斉に落ち、暗転した空間が数万本のペンライトの光で埋め尽くされた。

重低音がドームの床と肋骨を揺らし、七人がステージの下からポップアップで飛び出してきた瞬間、葵の歓声は周りの悲鳴にかき消された。

まばゆい照明、息の合ったダンスとクリアな歌声。

目当ての陸、魁たちが葵たちの座るアリーナブロックへ向かって手を振った瞬間、葵は「陸と目が合った！」と詩織の腕を強く掴んだ。詩織も興奮気味に「絶対葵のこと見てたよ！」と返してくれる。

最高の音楽、最高の推し、そして最高の自分。

この夜、大阪の街を包み込む空気は、葵にとってどこまでも甘く、幸福な熱狂に満ちあふれていた。

【第二章】 トイレ清掃人・佐々木伸二

「……ちっ」

佐々木伸二は、モップを絞る手に思わず力を込めた。

手首に伝わるゴム手袋の嫌な感触。今年で五十歳になったというのに、なんで自分が、こんな場所で人が汚したトイレを掃除しているのか。床の汚れをモップで拭き、自分の仕事を思い知らされるたびに、胃の底から苦い汚物がせり上がってくるようだった。

「一歩前へ」って本当だよな。「朝顔」に収まりきらずに飛び散った飛沫は、毎回きちんと掃除しなければ悪臭のもとになる。佐々木はつくづくそう思う。

朝顔にはちよこんと前に出た、受け皿みたいな部分があり、健康な若い男なら、多少勢いがないくても、最低限そこに収まるものだ。しかし、佐々木の目の前にある朝顔の下には、長

辺三十センチほどの水たまりができていた。

「前立腺肥大かよ。弱すぎだろ」

いや、勢いが弱いなら、個室で座ってすれば良いのだ。それに、こんな汚した床を誰が掃除すると思っっているのか。

佐々木は、かつて中堅企業の正社員として、それなりの立場で、それなりのスーツを着てデスクに座っていた。重要な電話を受け、大儲けにつながる商談にも携わり、重要な決裁をし、部下のマネジメントも抜かりなくやってきた。だが、一年前——会社の女子トイレに仕掛けた小型カメラが見つかったことで、運命が変わってしまった。幸い警察沙汰にはならず示談で済んだものの、懲戒解雇となった。

「ふう。男子トイレの清掃は終わった。さあ、女子トイレに行くか」
解雇の傷がついた中年男に、まともな再就職先などあるはずもない。佐々木は自嘲する。

せめて四十代だったら。誕生日というものは、誰に対しても平等に来るものらしい。たとえば、四十九から五十になる自分のような、残酷なケースだとしても。

資格もなく、この一年間のうちに職を転々とした挙句に行き着いたのが、大阪。清掃員の仕事だった。派遣でなく、常勤社員というのが決め手だった。

以来、人手不足を理由に男子トイレも女子トイレも関係なく、所属する清掃会社が契約する、これらのビルの清掃に回る日々。女子トイレで、利用客の女性たちから向けられる「なんで男がここにいるの」と言いたげな、露骨に嫌悪感を孕んだ視線。

佐々木の心にあつたのは、反省などという高尚な感情では断じてなかった。

かつて勤めていた会社で、女子トイレへの盗撮が発覚して会社を追い出されたあの屈辱。警察沙汰こそ免れたものの、積み上げてきたキャリアも世間体もすべてを失い、五十を過ぎて行き着いた先が、トイレの清掃員という、彼自身が自虐する「底辺」の仕事だった。

自分を貶め、この泥の底へ叩き落とした、前の会社のあの女。そして、自分を冷ややかな

目で見下し、会社から排除した連中への、ドス黒く煮詰まった執着と怨念――

だが……この仕事は悪くない。

作業服に身を包み、モップとワゴンを引いて歩く自分を、すれ違う女たちは誰一人として意識しようとしめない。視線すら合わせず、まるで背景の壁か空気であるかのように通り過ぎていく。

自分は「透明人間」なのだ。

会社から見捨てられた自分。トイレ清掃員という立場。それこそが、女たちの最も無防備な領域へ、誰にも怪しまれずに足を踏み入れられる最強の「カード」だった。

俺を見下しやがって……。だがな、お前らがどれだけ澄ました顔をして歩いていようが、俺が本気を出せば。

毎日、目の前を通り過ぎていく若い女たち、スーツ姿のOL、生意気そうな女たち。彼女たちが自分を「見えない存在」として扱うたび、佐々木の胸の奥で暗い欲望が顔を覗かせ

る。

女子トイレの清掃、機器の点検、個室の管理。清掃員という職権をフルに活用すれば、誰にも怪しまれることなく、いくらでも「罨」を仕掛けることができる。

事前にネット通販で買い揃えておいた、超小型の隠しカメラ。人目の途切れた隙を突き、和式トイレのある奥の個室へ滑り込むと、佐々木はサニタリーボックスの正面にあるネジ穴へと狙いを定めた。

元々留められていたネジを外し、カメラのレンズが埋め込まれたダミーのネジ頭へとすり替える。本体やバッテリー部分はボックスの内側に隠し、黒い消臭ゴミ袋で覆い隠してしまえば外からは一切見えない。使用済みのナプキンやタンポンが放り込まれる汚物入れの中身を、わざわざゴミ袋をめくって検分するバカなどいるはずがなかった。清掃員である自分以外は。

正面の絶妙な高さと角度。そこからは、金隠しの手前——女たちが最も見られたくない無

防備な排泄の瞬間を、広角レンズで余すことなく捉えられる、神のアングルとなるはずだった。目立たぬよう、かつ確実にネジを締め込み、仕込みを完了させる。

他人の無自覚な日常の隙間に忍び込み、その秘められた生々しい瞬間を、こっそりと、じっくりと舐め回すように観察すること。

佐々木を突き動かしていたのは、何よりもまず、長年抑圧され肥大化してきた歪んだ性癖——他人の最も羞恥に満ちた生々しい性癖と排泄をこっそりと覗き見るという、抑えきれない性的衝動そのものだった。

そして、その淫らな欲求が満たされると同時に、自分をゴミのように扱ってきた女たちの尊厳を、気づかれぬ場所から踏みにじっているという優越感が湧き上がってくる。

性欲の充足と、結果として満たされるドス黒いミソジニー。

女たちを自分の完全な支配下に置いているという錯覚こそが、佐々木にとって失ったプライドを埋め合わせる、病的な快樂の源泉だった。

すでに仕掛けを終え、本分であるトイレの清掃も佳境に入った頃、背後から刺すような声が飛んできた。

「ちよつと！　ここ女子トイレですよ。なんで男性が掃除してるんですか」

振り返ると、一人の女が立っていた。二十代後半といったところか、焦げ色のウェーブがかった髪の子だった。整った顔立ちには、隠しようもない困惑と、多少の軽蔑の色が浮かんでいる。

自分が掃除している間も、関係なく、他の女が何人も入ってきた。こういうことは慣れているとはいえ、今日は、面と向かっていわれるパターンか。目の前のこの女は、そういうことを気にする女なのだ。

「……昨今の人手不足のため、会社の方針で男女関係なくシフトが組まれております。女子トイレの掃除の仕方も研修を受けておりますので」

佐々木は努めて平身低頭に、マニュアル通りの言葉を返した。

「でも非常識だわ」

「抵抗がおりでしたら、一旦外に出て改めますが」

佐々木が横に置いたモップと掃除バケツを一瞥すると、女は心底嫌そうな表情で小さく息を吐いた。

「……もう、仕方がないわね。いいわ」

自分のせいで掃除が滞ってしまうのは良くない。そう気づいたのかもしれない。そう吐き捨てると、女はそのまま、カメラを仕掛けたばかりの奥の個室へ向かい、ドアを強く閉めた。

乱暴にボタンとドアを閉める音と、そのすぐ後のカチャと鍵のかかる音を聞きながら、佐々木は唇を舐めた。高飛車な態度、見下すような目つき。あの女のプライドを無様に踏みにじってやりたいという不快感で、胸の奥が熱く焦げ付くようだった。

清掃用具を抱えたまま、このあとの工程をつつがなくこなしていく。他意なく、掃除だけをしている。本心から、「このトイレを綺麗にしたい」という思いが周囲に伝わるように。

そんな雰囲気装いながら、彼女の去り際に一瞬視界に入った胸元を思い返す。

黒いストラップのついたショップのネームホルダー。そこに刻まれていた小さな文字。

『橘 玲奈』

橘……玲奈、か……

誰もが知っているアパレルショップのロゴと、その名前を頭の中で噛み締める。

まさか今自分がカメラを仕掛けた個室に入ってくれるなんて。

自分をゴミのように見下したあの高飛車な女が、いま仕掛けたばかりのカメラの真ん前で無防備に姿を晒している。そう想像しただけで、口の奥に甘苦い唾液がじわじわと溜まっていくのが分かった。

モップを手にして、彼女が入った個室前の床をゆっくりと拭き始めた。清掃員のフリを装いながら、全神経を聴覚だけに集中する。

「……で、何で和式なのよ」

薄いドア越しに、小さく舌を打つような悪態が漏れ聞こえてきた。

直後、「ジャー」という、水を流すような擬態音が個室内に響き渡る。擬音装置の電子音だ。

あの女が……俺の仕掛けたカメラの前で……

背徳的な想像が脳裏を駆け巡った瞬間、佐々木の背筋にゾクゾクとした熱い悪寒が走った。モツプを握る手袋の中で、指先が微かに震える。居ても立っても居られないような猛烈な衝動と、胸を突き上げる異様な興奮に、息が荒くなりそうになるのを必死で押し殺した。

やがて「カチャリ」と解錠の音が響き、ドアが開いた。

出てきた女は、まだ目の前に立っている佐々木の姿に眉をひそめ、「まだいるの？」と言わんばかりの露骨な嫌悪を込めた一瞥をくれた。そのまま一言も発することなく、ツカツカとヒールの音を響かせて洗面所の方へと去っていく。

佐々木は言葉を発せず、ただ無言で頭を少し下げてその背中を見送った。

女の姿が洗面所の壁の陰へと消えたのを見届けると、佐々木はおもむろにその個室へと足を踏み入れた。カメラの回収はまだ先だ。いま急いで取り出せば、他の利用客に見つかるリスクがある。

佐々木は背後でドアを軽く引き寄せると、狭い空間で大きく鼻から息を吸い込んだ。

洗剤の匂いに混じって漂う、かすかな香水の甘い香りと、ひとりの女が直前までそこにいたことを物語る体温の残像。

……いや、体温なんて生ぬるいもんじゃない。佐々木は心の中で自嘲気味に呟いた。鼻腔をくすぐる匂いの本質。

これは……おしっこの匂いだ。

米を蒸したような独特のゆで臭を基調に、その奥からツンと刺すような微かなアンモニアの塩辛さが混じり込んでいる。

フツ……俺もすっかり匂いのソムリエだな。

薄暗い個室の中でゆっくりと目を閉じ、残り香を肺いっぱい満たしていく。昼間、自分を心底見下したあの高飛車な女の排泄の痕跡を全身で受け止めているという事実が、歪んだ優越感となって胃の底から沸き上がってきた。

こんなことをするってのは、どうだろう——。もっとエロいこと。

突き動かされるように膝を折り、便器へと顔を近づける。

うっ、と息が詰まった。不特定多数が使う公衆トイレ特有の複雑な悪臭が鼻を突く。だが、その混ざり合った排泄物そのもののような不快感の中に、確かに彼女特有の匂いの痕跡が残っていた。

たまんねえな……ッ。

背筋をぞくぞくと快感が駆け抜ける。そして視線を少し上げれば、サニタリーボックスの隅——ネジの頭に偽装された極小のレンズがあるはずだった。これは、気づかない。自分でもどこにあるのかわからないほどのものだ。だが、あのネジの穴が、いまのいままであの女、橘玲奈のすべてを克明に記録しているはずなのだ。

——その日の業務終了後。

夕方の清掃時間、誰もいないタイミングを狙い、その女子トイレで、佐々木は素早くカメラを回収した。そして作業服のポケットへ滑り込ませると、いつものように掃除の仕上げにかかった。そして、退勤時間を迎えると、足早に現場を、自らの職場を後にした。

家路を急ぐ佐々木の胸にあったのは、達成感よりも焦燥感だった。

事前にテストした小型バッテリーの持続時間は、せいぜい三時間から長くて三時間半といったところだ。

カメラを仕掛けたのは朝一番の清掃時間帯。それから夕方の最後の清掃時間帯に回収するまで、かなりの時間が経過している。当然、勤務時間の途中でバッテリーは切れているはずだった。

……撮れているか？ 頼む、撮れていてくれ……

アパートへ向かう足取りが自然と早くなる。あの高飛車なショップ店員の女が個室に入っ

たのは、自分がカメラを仕掛け、清掃を始めた朝の時間帯だ。計算上、カメラを設置してから彼女が入るまでのタイムラグはわずか数分。長くても十分。絶対に映っているはずだったが、万が一スイッチが入っていなかったら、あるいはアングルが外れていたら——そんな不安が胸を押し潰しそうになる。

佐々木は十三駅近くのアパートに住んでいる。梅田からすぐなのにこのあたりの家賃は安い。職場にも近いし、その気になれば、橋を渡って、自転車で通勤することもできる。東京から流れついて、見つけたのがこのエリアだった。

ボロアパートの狭い自室に飛び込み、鍵を閉めると、佐々木は鞆から小型カメラを取り出した。便所掃除で汚れた手でノートPCを開き、震える指先でマイクロSDカードを抜き取り、スロットに挿し込む。

画面には、動画から自動生成された画像のサムネイルが映っている。新規フォルダを作成し、そのデータを移していく。録画データの合計時間は約三時間ほど。何が映っているのか。

心臓が早鐘を打つようにドキドキしている。

三時間で……一人あたり平均八分使ったとして、二十人前後か。なかには十分も居座るやつがいるかもしれないし、用を足さずに化粧直しだけで出ていくやつもいるかも……

計算を巡らせながら、佐々木は唾を呑み込み、移動できたファイルをダブルクリックした。

（以下は、有料版にてお楽しみいただけます）